

報道機関 各位

熊本大学

## 【記者発表のご案内】

### 西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明

#### (ポイント)

- 明治10年(1877)の西南戦争が水前寺地域(熊本市中央区)に及ぼした影響が、細川家史料の分析から明らかになりました。
- 交通の要衝であった水前寺地域は、明治10年2月の西郷軍の熊本侵入にともない、県庁の移転候補となりました。また、同4月には立て続けに三度も戦場となり、地域住民の多くが避難する事態となりました。
- 水前寺成趣園<sup>じょうじゆえん</sup>の御茶屋「酔月亭」<sup>すいげつてい</sup>は西南戦争で焼失しましたが、具体的には政府軍の放火で焼失した事実が判明しました。

#### [記者発表について]

本研究成果について、詳細を説明する機会を下記のとおり設けます。参加をご希望の場合は、準備の都合上、別紙「連絡票」により、8月1日(金) 17:00までに、熊本大学総務部総務課広報戦略室までご連絡願います。

・日時：令和7年8月5日(火) 10:00~11:00(予定)

・場所：熊本大学工学部1号館2階共用会議室A

(熊本市中央区黒髪 2-39-1)

#### (概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授らは、西南戦争時における旧熊本藩主細川家の記録「明治十年変動中日記等写」を分析しました。その結果、水前寺地域をめぐる以下の新事実が明らかになりました。

- ① 明治10年2月19日、西郷軍の侵入を控えた熊本鎮台は、戦略上の観点から熊本市中に放火し、焼き払います。それにともない、当時古城<sup>ふるしろ</sup>にあった熊本県庁は最終的に御船へ移転しますが、移転先の候補には、細川家の砂取<sup>すなとり</sup>絞蠟所<sup>こうろうしよ</sup>(現旧熊本市立体育館跡地広場)があげられていました。

② 交通の要衝であった水前寺地域は、熊本城から脱出した政府軍vs西郷軍（4月8日）、川尻を追われた西郷軍vsそれを追う政府軍（4月14日）、砂取絞蠟所などに駐留した政府軍vs健軍・保田窪などに展開した西郷軍（4月20日）というように、短期間のうちに三度も戦場となりました。その結果、多くの地域住民が避難を余儀なくされました。

③ 当時の水前寺成趣園には、1670年代に建てられた御茶屋「酔月亭」があり、それが西南戦争で焼失した事実は知られていましたが、具体的な経緯は不明でした。しかし、上記史料の分析により、4月8日、熊本城から脱出した政府軍（突<sup>とつ</sup>隊）による放火で焼失した事実が判明しました。

本研究の意義は、水前寺地域における西南戦争の展開とともに、当該地域の住民や細川家の関係者からみた戦争の実像を、初めて本格的に明らかにしたことにあります。

## （説明）

### 〔本研究の背景〕

本研究で分析した「明治十年変動中日記等写」（以下、本史料）は、永青文庫細川家史料「明治十年 日誌」（目録番号11.5.21）に綴じ込まれた全49丁の記録です（史料1）。本史料を作成したのは、旧熊本藩主細川家が経営していた砂取絞蠟所です。これは、江戸時代の熊本藩による製蠟所を、明治維新後に細川家が継承したものでした。砂取絞蠟所は、現在の旧熊本市立体育館跡地広場（現熊本市中央区水前寺公園）にあり、周辺には水前寺成趣園や細川内膳家の邸宅である砂取細川邸（現熊本県立図書館／くまもと文学・歴史館）がありました。水前寺地域は、熊本と木山をつなぐ木山往還のルート上にあり、水運で川尻ともつながる交通の要衝でした。

本史料は、明治10年の砂取絞蠟所の日記などから、西南戦争関係の記事が抜粋され、翌11年11月に作成されました。明治10年2月17日から9月28日までの記述があります。本史料の存在は、2007年時点で知られていましたが、その後本格的に分析されることがなかったため、今村准教授らは2021年6月から解読作業に着手していました。

### 〔前提知識①—西南戦争と熊本県庁の移転〕

2月15日、西郷軍は鹿児島を出発します。西南戦争の始まりです。同18日、先発隊は水俣に到着しました。

西郷軍の侵入を前にした同19日、熊本城が炎上します。さらに同日、熊本鎮台は、戦略上の観点から熊本市中に放火し、家並みや街並みを焼き払います（いわゆる「射<sup>しゃ</sup>界の清掃」）。これにともない、当時熊本城内の古城にあった県庁は移転を余儀なくされます。19日午後5時、県庁は御船に移転しまし

た。しかし、戦争の影響による周囲の不穏な状況から、21日に山鹿、23日に南関、3月25日に高瀬へと移転を繰り返します。最終的に古城に戻ったのは、熊本城攻防戦が終了した4月16日でした。

### [前提知識②—熊本城攻防戦と突囲隊]

熊本に侵入した西郷軍は、熊本鎮台が置かれた熊本城を攻撃し、2月22日から熊本城攻防戦が始まりました。攻防戦は長期化し、やがて城内では食糧が不足するようになります。

そのため、熊本鎮台は城外の政府軍との連絡を模索し、4月8日、鎮台の奥保鞏少佐は、川尻・八代方面にいた政府軍（衝背軍）と合流すべく、一大隊を率いて城外に突出しました（突囲隊）。突囲隊は、安巳橋周辺の西郷軍を突破し、宇土（宇土市）で衝背軍と合流することに成功します。その結果、4月15日、衝背軍は熊本城への入城を成功させ、約50日間におよんだ熊本城攻防戦は終結することとなります。

### [前提知識③—西南戦争最大の野戦となった城東会戦]

4月13日、御船と川尻が衝背軍に占領されると、西郷軍は本営を二本木から木山に移すことを決め、熊本城の攻囲を解き、一斉に退却を始めます。木山を本営とする西郷軍は、熊本城の東方にあたる大津・長嶺・保田窪・健軍・御船の各方面に兵力を展開しました。これを政府軍が攻撃したことで起こったのが、4月19・20日の城東会戦です。西郷軍と政府軍の総兵力が激突した西南戦争最大の野戦でした。

城東会戦では、西郷軍が優勢な戦場もありましたが、本営の木山が危機的状況になったため、西郷軍は矢部に撤退します。城東会戦の勝利で、西南戦争における政府軍の優位は揺るぎないものとなりました。

### [本研究の内容①—県庁の移転候補となった砂取絞蠟所]

本史料によれば、2月19日の午前中、県庁の官員2名が砂取絞蠟所を訪れ、移転先として借り受けたいと交渉しています。しかし、見分の結果、県庁としては手狭であったため、県官2名は別の候補地（健軍）に向かいました。但し、直後には県の監獄（のちの熊本監獄。当時は手取本町に存在）の監守も絞蠟所を訪問し、懲役人たちを収容するため、明き倉庫の借用を求めています。結果、20・21日の二日間、懲役人たちは空き倉庫に滞在しました。

古城から御船への県庁の移転は知られていますが、砂取絞蠟所という水前寺地域の施設が、御船に先行して移転候補地にあげられていた点は新知見です。また、県庁同様に移転を余儀なくされた県の監獄が、実質的に砂取絞蠟所に一時移転していた点も興味深い新事実です。

## [本研究の内容②—短期間でたびたび戦場となった水前寺地域]

本史料によれば、明治10年4月、水前寺地域は三度も戦場となりました。

第一に、熊本城から脱出した突圍隊と西郷軍との接触があった4月8日です。安巳橋を突破した突圍隊は、水前寺を経由して御船方面に向かいました。その際、突圍隊は砂取橋（現熊本市中央区出水）の周辺で西郷軍に発砲しています。突圍隊は無事に通過しましたが、この日の出来事について絞蠟所の関係者は、「いったんは激しく仰天した」と記しています。

第二に、川尻を追われた西郷軍とそれを追う衝背軍が衝突した4月14日です。この日、西郷軍約200名が砂取橋に集まっていたところ、川尻から登ってきた政府軍が、江津塘（加勢川右岸の堤防）から激しく砲撃しました。これに驚いた絞蠟所の関係者は、安置されていた秋葉社や稲荷社などを背負って避難しました。本史料では、この日の戦闘を「砂取戦争」と記しています。

第三に、砂取絞蠟所などに駐留する政府軍が健軍などの西郷軍を攻撃した城東会戦の4月20日です。政府軍は、4月17日から絞蠟所やその周辺に駐留していました。20日には、政府軍による激しい砲撃が行われる一方、西郷軍の反撃も激しく、絞蠟所関係者は「政府軍が負けるかもしれないと思うほどであった」と記しています。西郷軍の撤退後、関係者は戦争からの解放を大いに喜びました。

さらに注目されるのは、上記の「砂取戦争」などの影響で、当時の地域住民たちが一斉に避難していた事実です。熊本県公文類纂（熊本県立図書館所蔵）にある当時の記録には「地域住民たちが恐怖のあまり逃亡した」とあります（丸山伸治氏のご教示による）。相次ぐ戦闘は、水前寺地域を恐慌状態に陥らせるものでした。

## [本研究の内容③—突圍隊が焼失させた御茶屋「酔月亭」]

熊本藩主細川家の庭園であった水前寺成趣園には、1670年代に建てられた「酔月亭」という御茶屋がありました。その跡地には、大正元年（1912）に「古今伝授の間」という建物が移築され、現在に至っています。

『県社出水神社略誌』（県社出水神社社務所、1935年）が、「明治10年の戦争による兵火で酔月亭が焼失した」とするよう、酔月亭が西南戦争で失われた事実は知られていましたが、その詳しい経緯は不明でした。しかし、本史料には「4月8日の午前6時ごろ、突圍隊の兵士6,7名がやって来て、酔月亭（元御茶屋）に火をかけた」と記されています（史料2）。突圍隊は、熊本城に残った兵士たちに自らの進路を知らせるため、酔月亭に放火したのです。

西南戦争当時、酔月亭が焼失した経緯は、周知の事実であったと考えられます。しかし、その後は明治政府への懾りもあり、政府軍（突圍隊）の放火という点は伏せられ、やがて忘却されていったものと考えられます。

## [本研究の意義]

本研究には、以下の2点の意義があります。

### ① ほぼ未解明であった水前寺地域の西南戦争を明らかにしたこと

水前寺地域の西南戦争については、前掲『県社出水神社略誌』に記されたように、水前寺成趣園の酔月亭の焼失、あるいは砲台を築くために富士築山<sup>つきやま</sup>が破壊されたことは知られていました。しかし、それ以外の事実が知られることはなく、水前寺地域はあまり西南戦争の影響がなかった、という印象が強いものと思われます。

これに対して、本研究では交通の要衝であり、細川家の拠点が置かれた水前寺地域が、熊本県庁の移転、突圍隊の脱出、城東会戦などの重要な局面で、西南戦争の大きな影響を受けていた事実を明らかにしました。西南戦争や水前寺地域の知られざる史実に新たな光をあてたことに意義があります。

### ② 民衆史の視点に基づく西南戦争研究への寄与

近年の西南戦争研究では、非戦闘員である民衆に戦争が何をもたらしたのかを追究すべき、との提起がなされています。本研究は、そうした提起に答え、地域や民衆が経験した西南戦争の意味を問うものとなっています。

いったん戦争が起これば、地域や民衆には具体的にいかなる影響をもたらされるのか。本史料は、そのような想像力を喚起させるものでもあります。熊本市民にとっても馴染み深い水前寺地域の約150年前の経験を通じて、突如として混乱状況に置かれ、一日も早く戦争の終結を求めた先人たちの姿を想起してもらえれば幸いです。

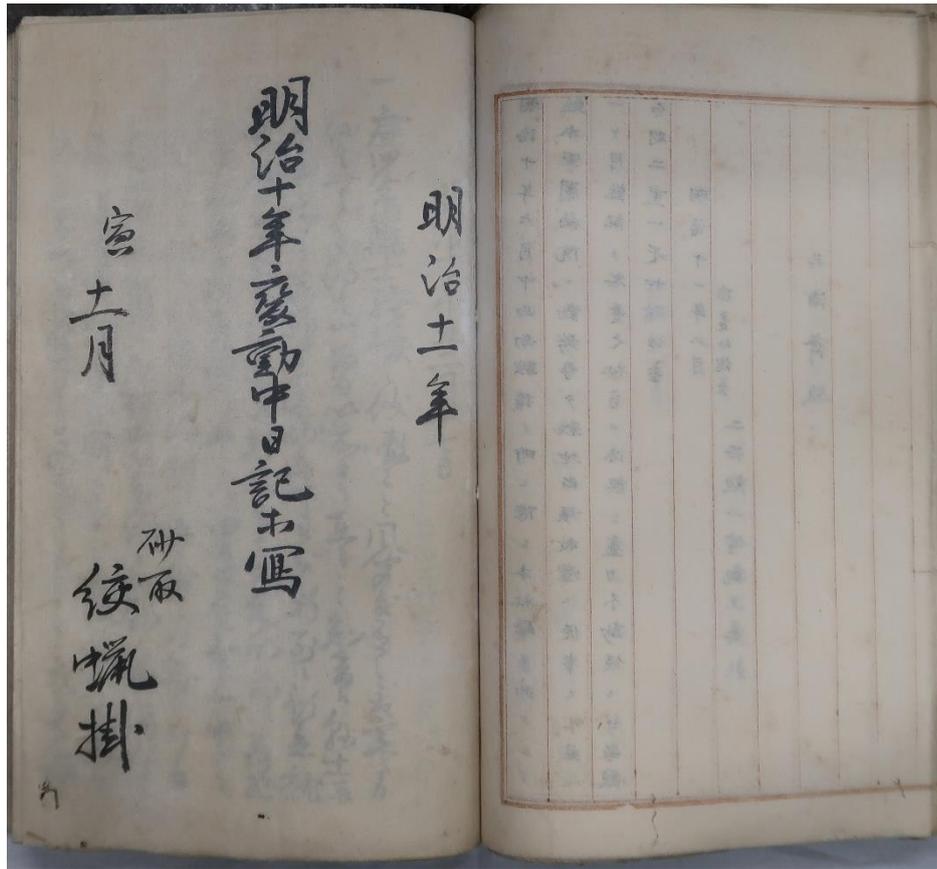
## [用語解説]

※西南戦争…明治10年（1877）、西郷隆盛が率いた鹿児島県士族を中心とする反乱。征韓論に敗れて帰郷した西郷が、士族組織として私学校を結成。政府との対立がしだいに高まり、ついに私学校生徒らが西郷を擁して挙兵、熊本鎮台を包囲したが、政府軍に鎮圧され、西郷は郷里の城山で自刃した。明治政府に対する不平士族の最後の反乱。西南の役。

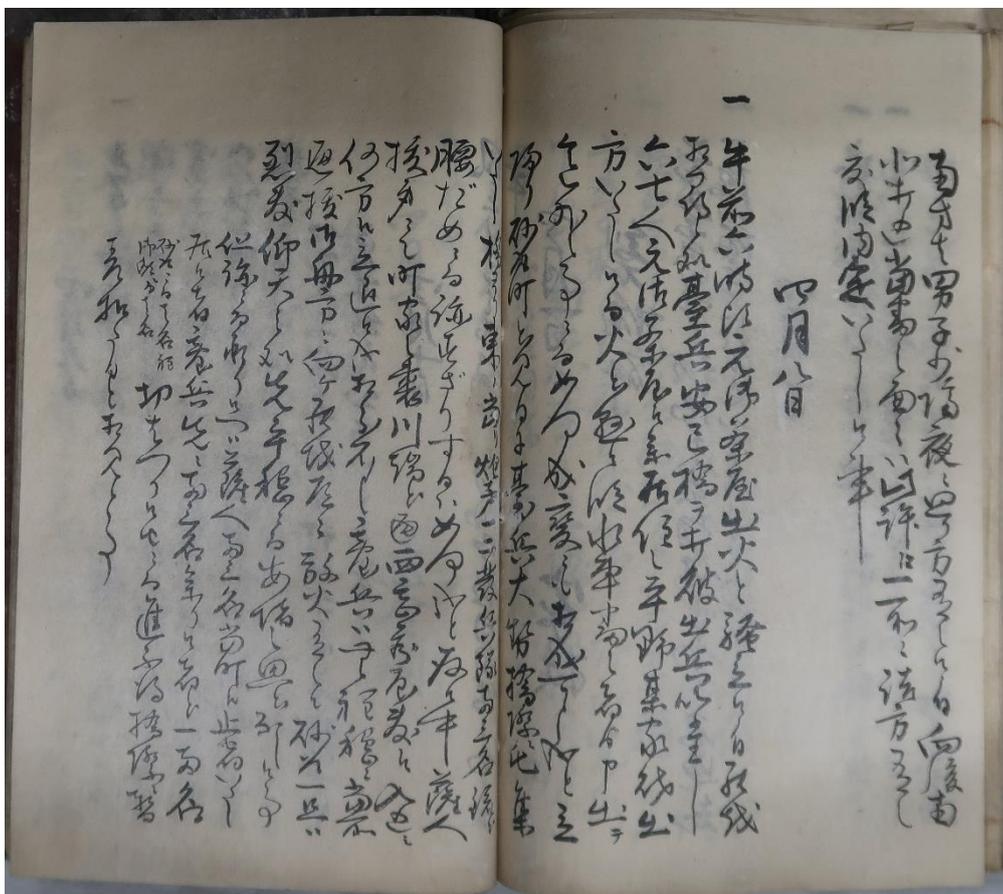
## [公開情報]

「明治十年変動中日記等写」の解説および一部の翻刻文からなる今村直樹「西南戦争と細川家・水前寺（上）一砂取絞蠟所『明治十年変動中日記等写』について一」が、2025年8月下旬に刊行される『熊本史学』第105号（熊本史学会発行）に掲載予定です。

史料1 「明治十年變動中日記等写」表紙



史料2 「明治十年變動中日記等写」4月8日条



**【研究・資料に関するお問い合わせ先】**

熊本大学永青文庫研究センター

担当：准教授 今村 直樹

電話：096-342-2301

e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp

**【報道に関するお問い合わせ先】**

熊本大学総務部総務課広報戦略室

電話：096-342-3271

e-mail：sos-koho@jimui.kumamoto-u.ac.jp

# 【連絡票】

西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明

・ 日時：令和7年8月5日（火）10時00分～11時00分（予定）

・ 場所：熊本大学工学部 1号館 2階共用会議室A

（熊本市中央区黒髪2-39-1）

貴社名	
ご出席予定	<ul style="list-style-type: none"><li>・ ご芳名：</li><li>・ E-mail：</li><li>・ 出席人数（                      名出席）</li></ul>

※恐れ入りますが準備の都合上、8月1日（金）17時までに、メール又はFAXにて送信くださいますようお願いいたします。

熊本大学総務部総務課広報戦略室宛

メール送付先：sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

FAX送付先：096-342-3110